

資料

最近の中国工業企業における 大衆運動のたかまりについて

小 嶋 正 巳

1 プロレタリア文化大革命の性質と生産現場

プロレタリア文化大革命は、マルクス・レーニン主義のあらゆる分野に、とりわけ直接的には中国における社会主義革命と社会主義建設のあらゆる分野にはかりしれないほどの巨大で深刻なえいきょうをおよぼした。中国社会主義経済の側面についていうと、それはある意味では、その名のしめすとおりの『文化』の領域におけるよりももっと巨大で深刻なえいきょうをあたえた。

すなわち、プロレタリア文化大革命というのは、一言にいて、社会主義社会における階級斗争とむすびつけてプロレタリアート独裁の意義を問いなおし、プロレタリアート独裁の突出を軸として思想を革命化し、人の思想の革命化を根本的なエネルギーの出どころとしてそれを物質化し、社会主義革命をさらに連続的に押しすすめて共産主義への移行のみちすじをみさだめようとするものであった。したがって、思想の革命化は、かならずかつことごとく社会の諸構造の変革に結実してゆく。文化大革命の名のとおりに、それは、社会主義の土台と合致しない思想・教育・文学・芸術・その他すべての上部構造の批判と変革が直接の目的であるが、この上部構造の変革は、必然的・不可避的にその土台・下部構造に能動的に反作用し、下部構造の意識的な共産主義への前進を実現させてゆく。そして、このようにさらに一步前進せしめられた下部構造が革命化された意識を定着させ、ふるい矛盾を歴史の発展の方向にそって解決すると同時に、前進のためのあたらしい問題を提起するのである。

このような大衆の思想の革命化とプロレタリアート独裁の突出を起動力とする上部構造と下部構造の能動的な相互作用＝連続革命がもっとも集中的にあらわれてくるのは、やは

りほかならぬ生産の現場である。思想の革命化を物質的な力量にかえるというのがプロレタリア文化大革命の本質であるとすれば、それを実現するもっとも主要な舞台は生産の現場である。またプロレタリア文化大革命のもっとも主要なでない手はプロレタリアートであるのだから、その成果を最終的に結実させるのはやはり生産の現場である。そのような生産の現場を直接的に包括する各工場各企業の管理運営、さらにそれらを一つの単位として全体を包括し規制する社会主義計画経済には、それゆえに、プロレタリア文化大革命をとおしてつかみとられたすべてのものが具体的にいきいきとあるいはなまなましく体现されているし、また体现されつつある。

プロレタリア文化大革命は、厳密に狭義にみれば、1965年10月毛沢東のつよい示唆によって上海において発表された姚文元の『新編歴史劇「海瑞免官」を評す』（『人民日報』への転載は同年11月30日）を革命開始の号砲とし、1969年4月の中共九全大会をもって総括されたといえるであろう。おおまかに全体的に言えば上記の時期、もうすこしこまかくいえば上記の期間のうちで労働者が生産現場で造反決起しはじめてから奪権して三結合の革命委員会を樹立するまでの時期、それは、いわば革命のるつぼがもっとも灼熱したときであり、従来革命的なものに混在して全体の路線を資本主義復活の方向へねじまげようとしてきた修正主義的要素をもっとも徹底的なかたちで破壊しつくした時期であった。その正面きっての斗争が激烈をきわめただけに、生産の現場は混乱し、従来の秩序は完全にくずれ、まだ正確な数字としては確認されないが、生産量そのものは相当のていど打撃を受けたことはうたがいない。だが、その革命時期における生産現場の混乱および生産にたいする打撃は、そのまま修正主義要素にたいする打撃となり、ふるいものを破壊する徹底さに比例して新生の事物の革命性をふかめその規模を大きくした。『大批判・大連合』の基礎のうえに三結合の革命委員会が成立すると、基本的な方向は、ふるいものの破壊からあたらしいものの建設へとむかう。おおまかに全体的に言えば、前述のとおり、1969年4月の中共九全大会以降、それは全国的なたかまりをはっきりとみせはじめた。

九全大会以降、『革命に力をいれて生産をうながす』大衆運動が全国的規模でほうはいとしておこり、つぎからつぎへと過去の歴史に経験したことのないまったくあたらしい革命的な事物をうみだしてきた。それらの革命的な新生の事物・いわゆる『典型』といわれるものをつないでみると、われわれは、そこにあらためてプロレタリア文化大革命の本質はなにであったかということをはっきりとみさだめることができるおもいがする。

2 プロレタリア文化大革命後の資料の性格

もちろん、われわれは、プロレタリア文化大革命がなすとげたもの・とくにそれが社会主義企業の管理体制としてどのように定着しつつあるかということについてまだ正確に・全体的に・系統的に・理論的に理解するにたる十分な資料を入手しえないでいる。しかしながら、われわれが入手しうる限定された資料のなかからでも、新生の革命的物事のいわゆる『典型報告』については、かなりの量を収集することができる。そして、この『典型報告』をつないでゆくことによって、わたしは、かなり本質的に正確なものが見つかりとれるのではないかと考えている。

上記のことについて、主題とはややなれるかもしれないが、本質的には重要なかわりあいがあるとおもうので、すこしたちいってわたしの理解をのべておく。

周知のように、プロレタリア文化大革命は、思想的な面からいえば、毛沢東思想の学習を核とする社会主義教育運動から直接発展したものであり、その毛沢東思想を最大最高の武器として前人未踏の革命過程がきりひらかれ、そして、プロレタリア文化大革命の第一の・最大の成果として、毛沢東思想が中国7億の人民に人類史上いまだかつてその例をみないようなひろがりをもつてつかみとられたのである。7億の人民の一人ひとりが変革の思想を自覚的につかみとり、それでもって自己の一挙手一投足を律してゆくといいこと、それは、エンゲルスがいったように『人間がみずからの歴史を十分な意識をもって自分でつくりはじめる』最初の形態であり、『必然の国から自由の国への人類の飛躍』のはじまりである。

もちろん、それまで広範な労農大衆が自覚的な思想をもっていなかったなどというのではない。それどころか、人間は思想をもつことによってのみ人間たりえているのであり、その人間の正しい思想は、『生産斗争・階級斗争・科学実験』からのみうまれてくるのであるから、当然、これまでの人類の歴史において、直接生産にたずさわってきた労農大衆こそが人間の正しい思想をうみだし・それを身につけてきたのである。その思想が人類の歴史をみちびいてきたればこそ、人類の歴史は自然の歴史から独立して発展し、社会主義という『自由の国』の入口まで到達したのである。

しかしながら、これまでの歴史において労農大衆がみずからうみだしその身につけていた思想は、感性的・経験的・まだ荒けづりなものであり、それだけにその本質的なもの・つまり変革のための力量という面をいきいきと突出させたものでもあったが、同時に、ま

だ普遍化・理論化・体系化されていず、一人ひとりが自覚的に法則として認識したものを意識的に運用するということまでたっしたものではなかった。

感性的・経験的な認識を理性的な認識までたかめ・それを理論としてうちたててゆく作業は、階級社会においてはもちろん社会主義社会においても、従来主として知識分子にゆだねられていた。

階級社会においては、支配者階級は、知識分子にこの作業をうけおわせることを利用して、労働のなかからうみだされたいきいきとした変革の思想を圧殺し、その死骸に観念の経帷子をさせ、それを理論と僭称して抑圧と搾取の道具にかえてしまう。社会主義社会になっても、社会的分業がなお強固に固定され、しかも知識分子が十分にプロレタリア的に改造されていないときには、このような階級社会ののこりかすがもちこされ、理論とか思想とかいえば、それは、ブルジョア知識分子が労働する人間から思想をとりあげるために発明した・万巻の書物に通曉しなければ理解しえない呪文のような言葉といいまわして構成され、そうであればあるほど高尚な理論・思想であるような迷信がのこされた。またいったんこの迷路にふみこむと、そのような理論や思想は、変革の武器としてそれをもとめている労農大衆には無縁のものとなり、批判的批判家が世界をさまざまに解釈する観念遊戯の道具に墮してしまう。

わたしがここで強調したいのは、われわれが従来『理論的』ということばを冠してありがたがってきた文献は、多少ともこのような傾向をもっていたのではないか、そしてその迷信がプロレタリア文化大革命によって中国でうちやぶられつつあるということ、したがってまた、われわれがプロレタリア文化大革命を本質的に理解しようとするれば、われわれ自身の『理論的』ということばの意味を再検討してみることが不可避である、という点である。

このことをもうすこしつっこんで具体的にいうと、たとえばわたしは、この節の冒頭において、プロレタリア文化大革命の成果についての理論的な資料は十分入手することはできないが、いわゆる『典型報告』はかなりの量を見ることができると書いた。このばあい『理論的』資料というのは、具体的には党や政府の幹部あるいは職業的な学者が『客観的』立場から『学術的』概念を駆使し・各種の統計資料あるいは古典からの引用などもおりこみ・具体的な現場報告ではなく抽象的にかつ包括的に論述したもの、なんとなくそういうものを脳裡にえがいている。それにたいして、わたしが『典型報告』と称したものは、名のおった高級幹部や職業的学者ではなく生産の現場で実際に汗と油にまみれて

いる大衆が、自分の現場で実際にふるいものをどのようにうちたおしあたらしいものをどのようにうちたてたかを自分がやってきたとおりに具体的にいきいきとのべ・その経験を総括したもの、したがって、そこでは学術用語のかわりにすべてが労働者の日常語で語られ、古典からの引用のかわりに労働者どうしの討論が会話体でそう入され、『客観的な』立場のかわりに目標をもって変革にとりくむ実践者の主体性・主観的能動性がはじめからしまいまでつらぬいているようなドキュメントをさしている。われわれには、自分自身が階級社会における理論の墮落に狎れすぎて、活きた思想よりも死んだそのほうを高級で厳密なものだなどとおもいこみ、後者の『典型報告』などは理論的なものとはいえないという潜在意識があるような気がする。

理論とか思想とかいうものが変革の武器であってあれこれの解釈の用具でないとするれば、いわゆる『典型報告』こそ、もっともいきいきとした理論であり活きた思想をもちこんだものである。理論とか思想とかいうものが特定の階級・階層の独占物ではなく、まさしく労農大衆自身のものでなければならぬとすれば、いわゆる『典型報告』こそ、もっとも直接的に鮮明にかれらの理論や思想を表明したものである。『典型報告』とわたしが分類したものは、理論的に不十分なものどころか、それこそもっとも理論的な資料といわなくてはならない。

これらの『典型報告』をみてもみると、それは、例外なく生産現場で労働者・農民・技術者・幹部が『生産斗争・階級斗争・科学実験』の三大運動のなかで具体的にどのように現状を認識し、そこから共産主義をみとおして自分の職場をどのように革命したかの報告書である。理論あるいはそれを包括する科学というものは、世界をさまざまに解釈するためではなく、世界を変革するためにあるとすれば、解釈ではなく変革の報告こそ理論的・科学的報告といわなくてはならない。このような観点からみなおしてみると、われわれは、従来解釈することばかりに馴らされて、変革の報告書を純粹に理論的なものとみない偏見に支配されがちであったといえるのではなからうか。

もちろん、いきいきとした実践的な現場からの報告書は、きわめて具体的であるだけに局部的であり、自分たちが直接経験した以外のことはかならずしも十分にふれる余地をもっていないことが多い。当然、これらの典型は、総括され・ひろくおしひろめられ・普遍的なものとして定着するまでにならなければならない。そうなってはじめて、最初のものが典型としての意味をもつことができるのである。この典型の総括と普遍化は、もちろんなによりも大衆運動をとおしておしすすめられるのであるが、この過程において、同時に

理論の面でも総括と普遍化の作業をおこなうことが不可欠であり、それなくして大衆運動による典型の拡大もありえない。具体的な典型のなかから部分の成果と全体につながる成果をみわけ、『因地制宜』の部分と妥協の余地のない原則的部分をみわけること、典型を革命の戦略的配置のなかに位置づけ、共産主義へのみちすじをきりひらくうえでの意義をみきわめること、その効果を測定して全体を調整すること等々は、『典型報告』に接続する不可欠の理論作業の分野に属する仕事であり、それなしには典型をおしひろげる大衆運動の方向をさだめることができない。

この理論作業においては、いうまでもなく、典型のなかに内蔵されている本質をつかみだしてマルクス・レーニン主義の原則と照合するために抽象的概念で理論の骨格をくみだて、質と量あるいは局部と全体の相関関係を正確につかみとるために統計学的に処理された数字でもって経験を表現することは、ぜひとも必要で欠くことのできない方法である。このようなわれわれが従来『理論的な』とよびならわしてきた形式をもつ文献は、それが必要なこと上述のとおりであるが、同時に、それはかならずいわゆる『典型報告』の総括としてしかでてこないことに十分留意すべきである。

中国におけるこの種の総括文献をわれわれが十分に入手しえないこと、やはり本節の冒頭に述べたとおりであるが、そのことは、プロレタリア文化大革命後の中国を科学的に認識してゆくうえで致命的な資料不足といえるものではなく、本節の冒頭にのべたとおり、『典型報告』をわれわれ自身が総括することによって、全局面をおしすすめてゆく本質的なものはかなり正確にとらえることができるはずである。そして、その過程でうたがいをなく検証されるのは、むしろわれわれ自身がマルクス・レーニン主義を世界を解釈する学問としているか・それとも『変革の理論』としてうけとめているかのわれわれ自身の立場・観点のほうであろう。

3 工業企業の生産現場におけるあたらしい大衆運動の高潮

さて、前節のような観点から、最近一年来における中国工業企業の生産現場における大衆運動の高揚についてのいわゆる『典型報告』をみると、おおまかにいってつぎの三つの柱があり、かつその三つの柱はやはり後述のように相互にあい関連し・補完しあっている。

三つの柱というのは、第一は、いわゆる社会主義革命競争を軸とする社会主義労働のあ

たらしい発展であり、第二は現場の労働者が主導権をもって直接的に技術革新の新しい手となるあたらしい技術革命運動の展開であり、第三は、企業管理のふるい規則・制度をうちたおし、あたらしいそれをつくってゆく大衆運動の高揚である。

第一の社会主義革命競争というのは、プロレタリア文化大革命を総括した中共九全大会の政治報告の生産現場における学習運動がピークにたっしていた1969年9月北京の首都鉄鋼公司から提唱され、プロレタリア文化大革命がひきだした『革命に力をいれ生産をうながす』という『革命と生産・精神と物質・上部構造と経済的土台・生産関係と生産力の関係についての正しい解答』（九全大会政治報告）を意識的・積極的・創造的・競争的に生産現場に適用しようとするものであった。それは、たちまちのうちに首都鉄鋼公司から武漢・包頭・太原・重慶の各鉄鋼公司および上海・天津・広州の冶金工業部門の労働者に熱烈な反響をよび、さらにそれから石炭・電力・機械・運輸の各部門へ波及し、1970年には全国全産業部門を包括して、プロレタリア文化大革命後のあたらしい経済的躍進をになう大衆運動の主軸となった。

この社会主義革命競争は、これまでの社会主義競争とくらべて重要な質的発展がある。それは、『革命を競争する』のであり、『革命競争のなかで中国労働者階級の志気と風格をくらべ、毛沢東思想で武装した革命的大衆の自覚の程度をくらべあう』ものであって、従来の社会主義競争のように経済指標が最終的な競争目標ではなくなっている。もちろん、『革命に力をいれれば、生産がうながされる』のであるから、どれだけ革命に力をいれたかは、生産の高まりに反映するし、事実、競争の成果を生産の側面において評価するのが一般的でもあるが、真に競争される内容は、生産のなかにどのようにプロレタリアートの政治を突出させたかという点である。したがって、この社会主義革命競争は、以前のいかなる時期の社会主義競争とくらべても、格段とその内容が豊富多彩であって、従来のように一つの経済的目標にしぼられることがない。その内容は、増産節約・新製品開発・技術革新・管理機構改革・労働と教育の結合等あらゆる問題を包括し、その多様な内容を『革命に力をいれ生産をうながす』・つまり生産における政治の突出という共通の尺度で競争し・統一し・評価するのである。

第二のあたらしい技術革命運動というのは、プロレタリア文化大革命のなかでもっともはやく奪権斗争に勝利した上海における労働者の大衆運動の典型であって、とくに1968～69年の上海工作機械工場の技術革新の大胆な経験が毛沢東によって『労働者のなかから技術者を養成するみち』として賞揚されて以来、全国に高潮し、『革命に力をいれて生産を

うながす』大道となったものである。

奪権斗争以後、大批判・大連合をへて三結合の革命委員会がうちたてられようとしていたとき、その指導綱領となったスローガンは、『労働者階級がすべてを指導しなければならぬ』という毛沢東指示であり、工場革命委員会が成立すると、全工場の生産の指揮と管理だけでなく、技術・設計・研究の分野においても労働者の指導権が確立された。この現場の生産労働者の権力運用における最初のそして最大の難関は、専門家が掌握していた研究・設計・技術指導の障壁をどのように占領するかであった。しかも、一方では、革命的労働者は従来の走資派のやりかたを『専門家による工場支配』と攻撃してきたのであるから、このことを自分たちの手でやりおえなければ革命の面目がたたず、他方では、奪権斗争中の生産の停滞をとりもどし・さらに生産を急速に発展させるためには、どうしても技術の側面を早急かつ完全に労働者が掌握する必要にせまられていた。どのようにしてそれをやりとげたか、また短期の観点からそれを実現させただけでなく、長期の観点からどのように労働者がその後技術革新のたしかなにない手となる保障をあたえたかは、後出の張梅華論文にいきいきと報告されている。

張梅華論文ではつぎのことにはふれていないが、この過程で新設計された24種の新型精密研削盤のうち、たとえば現場の生産労働者を中核とする『三結合』の設計グループがまったくその基礎から自力でつくりあげた平面研削盤と円筒研削盤は、外国の先進製品の枠から完全に脱却して中国の独創的な風格をもった新製品であり、工作機械のあたらしい系列をつくりだしたと評価されている。このことは、一つの事例にすぎないが、この技術革命運動の内容が単に生産現場の労働者に従来知識分子の独占物とされていた技術の先端部分を掌握させるというだけでなく、労働者が掌握すればその技術の内容自体が全体的・系統的にすっかり別のものになってしまうことを証明している。技術革命運動は、技術のない手と同時に技術の内容も根本的に革命したものと評価しなければならない。

第三の企業管理規則・制度改革の大衆運動についていうと、それは、第一の社会主義革命競争・第二の技術革命運動の二つの大衆運動の発展の必然的な結果である。

プロレタリア文化大革命の勝利によって・直接的には工場革命委員会の成立によって、従来の管理制度・とりわけ走資派によっておしすすめられた『一長制』は完全に破砕されてしまった。しかし当面のあいだは、革命委員会が成立するとすぐにあたらしい管理規則・制度が制定されたのではなく、旧規定・制度を棚上げしたまま革命委員会が一切の権限を掌握し、その権限の行使を『革命的大批判』に集中したことは周知とおりである。その

『革命的大批判』のなかから、『革命に力をいれて生産をうながす』社会主義革命競争や技術革命運動がもりあがってくる。それらの大衆運動を展開し発展させるための一つ一つの具体的な要求が、あたらしい管理規則・制度をつくりあげてゆくのである。

それゆえ、あたらしい管理規則・制度の制定は、当然、理念的・画一的なものを天下らせるといったやりかたとはまったく無縁であり、それぞれの工場・企業の『革命に力をいれて生産をうながす』大衆運動の要求と条件に応じ、大衆の意識水準に照応して、大衆自身によって決定されてゆく。したがってまた、あたらしい管理規則・制度は、各工場・企業の実情を反映してけっして画一的なものではないが、その具体的な要求の出所が『革命に力をいれて生産をうながす』という共通のものであり・法則的なものであることから、そこには例外のない共通の本質が貫徹している。いわゆる『精兵簡政』の原則である。毛沢東によってよびかけられたこの『精兵簡政——人員の精鋭化・行政機構の簡素化』は、おどろくべき徹底さをもったもので、それは、当面、生産を離脱している管理幹部・とりわけ革命委員会の常務委員と勤務員を3分の1にへらすことを目標にしていた。もともとプロレタリア文化大革命をとおして、生産現場をはなれた幹部は減少せしめられている。そのうえ管理機構を人員数からいえば3分の1に圧縮しようというわけである。圧縮された幹部は、当然生産の現場に配置される。

このような『精兵簡政』を共通の基軸として大衆運動としておしすすめられる管理規則・制度の改革は、したがってまた当然、単に機構の簡素化・能率化・民主化をはかり修正主義の温床である官僚主義をしめだすという企図だけでなく、もっと根本的に管理職能それ自体の変革と表裏をなしている。管理職能自体の本質的な変革なしに・つまり管理するとは生産現場にはいることとみつけないければ、生産過程から離脱している人員を3分の1に圧縮することなどとうてい不可能である。さらに、このような管理職能の革命は、一方では、主体である管理幹部自身の革命であると同時に、他方では、従来管理される側とみられていた現場労働者の本質的な変化・その革命的自律性の高揚なしにはありえない。すなわち、このような管理職能の革命は、生産現場における社会主義革命競争・技術革命運動の発展によってのみ、しっかりとうけとめられるのである。

以上のように、最近の中国工業企業の生産現場における大衆運動の三つの柱は、たがいにあい関連し・補完しあって、全体として『革命に力をいれて生産をうながす』巨大な大衆運動をもちあげている。あるいはこうもいえよう。いま中国の工業企業の生産現場で高潮している巨大な一つの大衆運動について、それを労働の側面からみれば社会主義革命競

争となり、技術の側面からみれば技術革命運動となり、管理の側面からみれば規則・制度改革運動となり、それぞれの側面は渾然一体であって、それぞれの工場や地域における具体的な運動にはもちろんそれぞれの主要な側面はあるにしても、これは社会主義競争・あれは技術革命運動と区別できるものではない。

この三つの大衆運動が出発点と帰着点をを同じうすることによって一つの巨大な大衆運動になっているということ、あるいは三つの運動のうちの一つからはじまりそれが発展すればかならず他の二つの運動が引きあげられてくるということ、この同一性の紐帯は、それぞれの運動の基底にはかならず毛沢東思想の学習とその活学活用があり、それがつねに大衆発動の原動力となり、運動の方向を決定する力となっていることからきている。『革命に力をいれて生産をうながす』ということは、生産のなかに政治を突出させることであり、それはとりもなおさず毛沢東思想でもってすべてを統率するということである。

いまこの点について、一言だけ最近の傾向について付言しておくならば、毛沢東思想の学習とその活学活用は、ここ一年来生産現場の大衆運動の大きな高潮とともに、単に毛沢東思想といわれるだけでなく毛沢東哲学思想の学習・活学活用といわれるようになった。このことは、まことに注目にあたいする。すなわち、それは、毛沢東思想の学習が『語録』と『老三編』に象徴的に代表される段階・プロレタリア的世界観の根本と『作風』を解決する段階から、7億の人民の一人ひとりがそれを基礎にしつつさらに一步すすめて、マルクス・レーニン主義・毛沢東思想の体系的理論構造を掌握し、それを意識的・自覚的に運用する段階にはいったことをあらわしている。毛沢東哲学思想の学習の中心的なテキストは、やはり『矛盾論』であり、そこで展開されている唯物弁証法の核心的な・それだけに抽象的な法則が、労働者の頭脳と手足をとおして直接的に日常の生産実践に適用されはじめていたのである。

このことは、一足とびに結論的にいえば、旧社会からもちこされている肉体労働と頭脳労働の区別・労働者階級と知識分子のそれぞれの分割再生産・労働と教育のそれぞれの排他性など、労働の真の解放にとって最後の障害物となったふるい分業にたいする最初の真正面からの挑戦の一形態と評価すべきものであろう。このことは、単に中国の労働者の毛沢東思想学習のよびかけに『哲学』ということばがはさまったことからの主観的な期待可能性をのべているのではけっしてない。そのことが現実に中国全土に巨大ないきおいでひろがりつつあることは、以下の紹介論文によって、はっきりと証明されているであろう。

以下に翻訳紹介する三編の論文は、上述したような最近の中国工業企業の生産現場にお

ける大衆運動の高潮の三つの側面をもっともいきいきとえがきだしたところの、『変革の理論』の典型として提出するものである。なお、紙幅の関係上、各論文とも文意を省略しない程度に抄訳したものである。さらに、現在われわれが入手しうる中国の定期刊行物からかなりの量のいわゆる『典型報告』を収集することができるが、当初これらの整理紹介をも意図していたが、やはり紙幅の関係上この部分は別の機会にゆづりたい。

*

*

*

工業戦線の増産節約運動をさらに浸透させよう

国家計画委員会執筆集団

本年は、わが国人民がプロレタリアート独裁のもとにひきつづき革命をおこなう重要な年であり、国民経済発展第4次5カ年計画の第1年目でもある。国民経済の急速な発展には、各部門いずれにおいても、より多くの物資・とりわけ若干の特定原材料・燃料・および設備を調達しなければならない。このような情勢に対応して、われわれは、真剣に毛主席の革命路線と政策をおしすすめ・政治を優先させ・全面的に計画化し・大衆を動員し・増産節約を励行しなければならない。

『われわれは大規模な建設をおこなおうとしているが、わが国はまだひどく貧しい国であること、これは一つの矛盾である。全面的・持続的に節約を励行することが、この矛盾を解決する一つの方法である』。この毛主席の教えにしたがい、昨年以來、わが国工業戦線では大規模な大衆的増産節約運動がくりひろげられ、大変りっぱな成績をおさめた。1971年の国民経済計画を全面的に完成ないし超過達成し、第4次5カ年計画の実現をかちとるためには、工業戦線の一つの重要な任務として、毛主席の上記の方針を真剣に学習し貫徹実行し、これまでの経験を総括しておしひろめ、大衆的な増産節約運動をさらにあたらしい段階にまでたかめなければならない。

節約するか浪費するかは、二つの路線・二つの世界観の斗争である

節約にはげむか浪費をするかは、ゆらい工業戦線における二つの路線の斗争の重要な側

面であり、多く・はやく・りっぱに・むだなく社会主義を建設し、社会主義的所有制・プロレタリアート独裁を強化し、資本主義の復活を防止する大事につながっている。偉大な領袖毛主席は、革命戦争の時代からつとにこの方針をわれわれに教え、解放後第1次5カ年計画の時期には、さらに一步すすめて、『節約は、社会主義経済の基本原則の一つである。中国は大国であるが、いまなお貧しく、ゆたかにするには数十年の期間を要する。数十年のちでも勤勉節約の原則は実行すべきだが、とくに勤勉節約を提唱し、とくに節約に注意しなければならぬのは、当面するこの数十年間であり、当面するいくつかの5カ年計画の期間内である』と指摘している。この毛主席の教えは、社会主義経済発展の客観的法則をあきらかにしたものであり、わが国の工業戦線で持久的に節約運動を展開する方向をさしめしたものである。

うらざり者劉少奇とその工業部門の代理人薄一波は、長期にわたって工業戦線で浪費をまきちらす反革命修正主義路線をおしすすめてきた。かれらは、基本建設と設計工作の面では『大型・洋式・完備性』を追求していたずらに広大な工場や職場をつくり・洋式設備を採用し、技術面では保守的で時代おくれの旧式設備・製造工程・製品の改革をおしとどめ、物資管理の面では『十分な準備・細心の使用』という口実で実際上は『十分な準備・十分な使用』・『在庫の無制限増大』をやり、生産面では単一経営をすすめて综合利用をはからない等々、原材料・設備・資金をきわめて大きく浪費し、社会主義の経済的基礎をそこない、同時にまたこのような浪費によって、革命隊列の一部の人間が腐敗し資本主義復活のために奉仕させられるはめになった。

プロレタリア文化大革命において、わが国の労働者階級は劉少奇の反革命修正主義路線を批判し、毛主席の『自力更生』・『刻苦奮斗』・『節約励行』・『浪費反対』の方針を実行する自覚を大いにたかめた。広範な大衆の路線についての自覚はきわめて明確なものとなり、増産節約は実際行動となった。全工業戦線において、在庫点検・設計革命・技術革新・综合利用の成果は大いにあがり、ふるいものを修理し廃品を利用し、労働力を増強し制度を改革し、節約代用を心がける気風がおこってきた。設計革命についていえば、工業および交通部門の多くの統計によると、大衆の審査と改革をへた大中型設計項目は、いずれも一般的に原設計による建設投資の15~20%を節約し、大量の設備・材料を節約し、さらに建設速度をはやめた。技術革新についていえば、北京・上海・天津・遼寧などの省市の1970年のかなり不完全な統計であるが、改革された120種の新設計の機械・電気製品中、その3分の2はもとの形式の時代おくれの製品にくらべて半分以下の重量となり、

あるものは90%も重量をへらした。このようにして国家のために大量の原材料・設備・その他の物資を節約したのであるが、このことは、節約工作もその他の工作と同様、根本問題は路線の問題であることをしめしている。

節約するか浪費するかは、二つの世界観の斗争である。勤勉節約は、プロレタリアートと労働人民の品性であり、浪費するのは、ブルジョアジーと搾取階級のうすよごれた本性である。すべての物資は、プロレタリアートと労働人民が自分の労働で作りだしたものであり、ブルジョアジーと搾取階級はそれを搾取と収奪によって手にいれるのである。したがって、当然、一方はそれを大切にし、他方は勤勉節約をはずかしいことと考える。

毛主席は、『プロレタリアートは自分の世界観で世界を改造しようとし、ブルジョアジーもまた自分の世界観で世界を改造しようとする』と指摘している。節約と浪費という二つの根本的にちがう観点から、必然的に二つのまったくことなる態度と行動がうまれてくる。あるものは、みえをはってものをばらまくのを『おうような』といい、くふうをしてこまかく節約するのを『気が小さい』といい、あるいはまた、『大型・洋式・完備』を追求して、それだけが正規のものとするなど、さまざまのかたちで浪費の理論をまきちらしているが、これらは、結局帰するところ世界観の問題である。ブルジョアジーの世界観から出発すれば、浪費に根拠ありと考え、必然的に工業生産と建設を資本主義経済の基準にあわせ、修正主義企業のやりかたにならうことになる。反対にプロレタリアートの世界観から出発すれば、浪費は根拠がないばかりか大きな犯罪と自覚するから、工業生産と建設をかならず社会主義的な刻苦奮斗でやりとげ、プロレタリアートの勤勉節約を模範とするようになる。どのような世界観をもっているかによって、どのような路線をとるかがきまる。革命的大批判をうまく展開し、劉少奇の反革命修正主義路線の余毒を肅清し、ブルジョアジーの世界観を徹底的に改造し、プロレタリアートの世界観をしっかりとうちたてて、はじめて毛主席の『節約を励行し、浪費に反対する』方針を自覚的に・真剣に・徹底的に貫徹し、工業戦線における増産節約運動をふかく持久的に発展させようるのである。

毛主席の哲学思想を運用し、増産節約の潜在力を十分にほりおこそう

唯物弁証法によると、矛盾は事物の発展の原動力である。工業生産のあたらしいたかまりのなかで若干の原材料および設備等の供給不足の矛盾があらわれたのはけっしてわるいことではなく、逆にそれは、工業戦線の増産節約運動をさらに発展させ、人の積極的要素

を十分に發揮して原材料の不足を解決するよう、われわれをうながすものである。

毛主席は、『弁証法的世界観は、主としてさまざまな事物の矛盾の運動を観察し分析することに熟達すると同時に、その分析にもとづいて矛盾の解決方法をみいだすよう、人びとに教えている』と指摘している。昨年来の増産節約運動の経験が証明しているように、われわれが積極的な態度をもって毛主席の哲学思想で矛盾を分析し矛盾を解決しさえすれば、原材料や設備などの物資の増産節約の潜在力はきわめて大きく、積極的に増産をはかるほか、在庫調査・技術革新・综合利用・品質向上等々は物資の供給不足を解決する有効なやりかたとなる。

在庫調査は、各部門各単位の現有の物資を十分に合理的に利用するもっとも簡便な節約方法である。これまで劉少奇一味の『在庫の無限増大』などという反革命修正主義理論のえいきょうがあつて、一方では大量の資材が大あくびをし、他方ではそれをさがしても得られない緊張状態があらわれたり、大量の資材が損失破壊されたりした。1970年には、各地で在庫調査と鉄鋼廃品回収の大衆運動が展開され、若干の原材料や設備の供給不足を解決するうえで大きな作用をはたした。

在庫調査は一回でおわるものではなく、たえずおこなう必要がある。われわれの同志たちは、まずなによりも在庫調査は一つの思想斗争であることを知らなければならない。それは、本位主義・主観主義・小団体主義・だんな風をふかすやりかた・おもいがつた態度・でたらめな話をするなどの悪風にたいし断固とした斗争の運動をおしすすめることであり、プロレタリアートが企業を指導してゆくうえでかならずいつもやらなければならない斗争の一つである。『毎年やっているのだから、今年はやる必要がない』などというのは、形而上学的な思想であり、すでに点検した側面だけをみてまだ点検していない側面をみず、潜在力のすでにほりおこした側面だけをみてまだほりおこしていない側面をみていない。人びとの自然にたいする認識が高まり、生産技術が不断に向上し、新技術・新工程・新材料・新設備が採用されるにつれて、それまで必要であつた材料や設備等々の一部はあまって放置され、適時に点検し利用されなければ、あたらしい圧力となるであろう。ある製油工場では、在庫調査をはじめたとき、若干の人たちはそんなに大した利得はでてこないだろうと考えていたし、第1回目の点検ではそれほど多くの剰余物資もなかつた。その後、かれらは二つの路線の斗争をけんめいにやり、革命的大批判をふかめ、真剣に毛主席の哲学著作を学習して、さらになん度かの在庫調査をおこなつたところ、一回ごとに効果は大きくなり、ついには最初の18倍以上の剰余物資を検出したのである。

技術革新をさかんにするには、原材料・設備および労働力の節約のためにあたらしい重要なみちをきりひらいた。1970年の節約運動における一つの重要な経験は、技術革新によって材料・設備・および労働力を手にいれたことである。広範な労働者大衆は、毛主席の『迷信をうちやぶり、思想を解放しよう』という教えにしたがい、劉少奇の『西洋崇拜思想』や泥沼をはいずりまわるような前進のないやりかたを徹底的に批判して、設計・設備・技術・および製造工程等の各方面で革新をすすめ、その結果、生産を増大させただけでなく節約も実現した。たとえば大連ディーゼル・エンジン工場では、これまで外国設計のディーゼル・エンジンを生産していたが、効率がひくいうえに大量の原材料を浪費するものであった。ところが、1970年の技術革新をとおして中国式のエンジンの製造に成功し、エンジン重量を従来の550キログラムから200キログラムにへらしたうえ、効率はもとの3倍に高めたのである。

実践から明らかなおと、工業戦線における技術革新は前途洋々たるものがあり、広範な労働者大衆と科学技術要員は十分にみずからの創意性を発揮することができる。製品の設計を改革し、軽量・小型・低原価・高能率の新製品をつくりだすこと、これが一つの側面である。製造工程を改革し、材料や時間や手間をくうふるい工程にかえて科学的な単純化された先進的工程をとり入れること、これも一つの側面である。さまざまな節約代用の先進的経験をおしひろめ、廃材料を好材料にかえ、資源の少い原料を資源の多い原料にかえること、これもまた一つの側面である。その他さまざまあろうが、技術革新運動をふかく展開してゆけば、原材料の増産節約はいくらでもやりようがある。

総合利用もまた、原材料の増産節約の一つの有力な施策である。これまで劉少奇の反革命修正主義路線のえいきょうで多くの企業では総合利用がおこなわれず、大量の利用可能な物資が廃液・廃滓・廃気・廃材としてすてられていた。この数年来、広範な労働者大衆は積極的に総合利用をはじめ、廃物を宝物にかえ、有害物を利用物にかえ、原材料の増産節約にきわめて大きな前途をきりひらいた。たとえば東北製薬工場では、数年来の総合利用の展開によって、年間1,600トン以上の食糧を節約したうえ、3種の廃品から73種の新製品をつくりだした。北京醸造工場では、これまで酒だけを生産していたが、現在では工場の廃材・廃液・廃気を利用して十数種の重要な製品を生産し、酒だけでなく電子工業原料・化学工業製品・医薬・農薬・および機械などの多種類の製品を生産する総合企業になった。

原材料の節約には、かならず製品の品質向上に注意をはらわなければならない。製品の

不合格は、きわめて大きな浪費である。品質の向上は、一つの製品でいくつかの製品の用をたし、おなじ原材料により大きな作用を発揮させ、きわめて大きな節約となる。量的発展のさい質を軽視しがちな一面性を防止・克服し、品質を保障し向上させるという前提のもとに、さらに一步すすめて原材料・燃料・電力の消費ノルマを低下させるようにしなければならない。これは、すべての企業が重視すべき問題である。

毛主席は、『生産斗争と科学実験にかぎっていえば、人類はたえず発展するものであり自然もまたたえず発展するものであり、永久に一つの水準にとどまることはできない』と指摘している。社会主義制度と毛主席の哲学思想は、われわれが生産の客観的法則をよりよく認識し利用して生産をおしすすめ、自然資源をより合理的に利用して企業の生産能力を十分に発揮させるうえで、きわめて有利な条件をつくりだす保障となっている。現在のところ、生産と建設における増産節約の潜在力はきわめて大きい。多くの企業の労働効率と設備能力はさらにもっと大きく発揮できるし、生産のための消費や製造原価も大きくひきさげることができるし、在庫物資ももっと十分に利用することができる。技術革新と综合利用がふかまり発展するのにしたがって、原材料の増産節約の潜在力はますます大きくなり、人びとがこの潜在力をほりおこす能力もまたかならずますます発展してゆくであろう。原材料の節約増産の面で『潜在力をすでにほりつくした』とする思想は、まったく根拠のないものといわなければならない。

大いに大衆運動をおこし、真剣に増産節約運動の先進経験をひろめよう

毛主席は、『どのような工作も大衆運動をおこすべきであり、大衆運動がなければだめである』と教えている。増産節約を少数の人数でやるのか、それとも広範な大衆に依拠し大衆運動を大いにおこすのかという問題は、単なる工作方法の問題ではなく、二つの路線の斗争なのである。経験のしめすとおり、在庫調査・技術革新・综合利用など、すべて大いに大衆運動をおこし広範な大衆の積極性と創造性を十分に発揮したからこそ、はじめて運動をふかく持久的に発展させることができたのである。

過去劉少奇は、『専門家による工場支配』の修正主義路線をおしすすめ、『大衆たちおくれ論』をまきちらし、大衆運動を敵視したために、多くの工場・企業の節約工作はひえきってしまい、しりすぼみになってしまった。プロレタリア文化大革命をとおして劉少奇の反革命修正主義路線が批判され、大衆が広範に発動され、増産節約はふかみのある大衆

的基盤をもつにいたった。

毛主席は、『大衆こそ真の英雄である』『人民大衆は無限の創造力をもっている』と教えている。節約のやりかたは大衆に依拠して考え、節約の潜在力は大衆に依拠してほりおこし、節約の前途は大衆に依拠してきりひらかなければならない。広範な大衆は、一日中生産の第一線で斗っており、生産の各環節および全領域に分布していて、自分の部署の仕事の状況についてはもっともよく知っている。かれらは、どこに浪費があるのか、どこから節約できるのかをいちばんはっきりさせることができるし、どのようにすればより少ない材料でより多くの生産物を手にいれられるかをもっともよく知っている。一言でいえば、かれらこそ、増産節約にたいしてもっとも発言権があり、もっとも有効で適切な節約手段を提起することができるのである。上海第一揚水ポンプ工場の1970年の製品革新は、1人の補助労働者の合理化提案から発展したものである。この老労働者は、長いあいだ揚水ポンプの台座を運搬する仕事をしているうちに、おなじ機械の台座の重量にかなりの差があることに気づいた。あるばあいは66キログラムも差があり、差が小さい場合でも13キログラムはあった。かれは、労働者階級の高度の政治責任感から、16種の揚水ポンプの台座重量について詳細な調査・分析・比較をおこない、台座材料節約の具体的建議を提出した。工場党支部と革命委員会は、この老労働者の革命的な提案に啓発されて、大衆的な製品革新運動をおこし、1970年中に17種の製品・27種の規格を改革した。改革後の揚水ポンプは、大いに軽量化・簡便化され、能力をたかめ、国家のために大量の鉄鋼を節約した。近代化された企業では、製品が複雑で加工過程が長いので、ひとりの人間が生産の全工程を理解することは困難であり、各環節のすべての労働者がたちあがり、その環節のすべての人がその頭脳と手足をはたらかせて方法を考えて、はじめて最大の効果をおさめることができるのである。

増産節約の先進的施策や先進的経験をつくりだすには、大いに大衆運動のたかまりに依拠しなければならないが、これらの先進的施策や経験をおしひろめるためには、さらにいっそう大衆運動のたかまりに依拠しなければならない。われわれの国家は何千何万という工場や企業があるのだから、わずかの節約施策もこれをひろめれば、巨大な節約効果をうむことになる。増産節約運動においては、大衆の新発見や創造をたくみに総括し、ときをうつさずこれをおしひろめ、一工場の節約施策を多くの工場の共同施策とし、一地区の先進的経験をいち早く全国におしひろめなければならない。一工場一地方の節約の先進経験を全工業戦線の財産・全国の財産とするためには、どうしても大いに大衆運動をおこ

さなければならない。石家荘発電所の労働者が発電設備を改革し、その出力を56%もたかめるという先進的経験をうみだして以来、全国の発電所は意気ごみたかく石家荘の経験をおしひろめ、半年余の期間内に発電設備の改造をおえ、その向上出力の総計は、1970年に国家があたらしく建設した発電所の総出力に相当したが、それに投入した鋼・銅材は新建設発電所の2.5%、投入した資金はおなじく3%以下というものであった。なんと巨大な節約ではないか。

何千何万の大衆を増産節約運動に動員しようとするれば、毛沢東思想で大衆に宣伝し大衆を組織すること、節約を名誉・浪費を恥辱とする与論をもりあがらせ、浪費現象を暴露して大衆の批判にさらすこと、一般的なよびかけと個別指導を結合させ、うまく典型をつかみだして全体とむすびつけること、このようなことがかならずおこなわれなければならない。さらに技術革新や综合利用の運動のなかでは、労働者・技術要員・指導幹部の三結合を実行することが一つの有効な組織上の施策であり、それぞれの側面の積極的要素を動員するのに有利である。大衆を節約励行にたちあがらせようとするれば、大衆動員による不合理な規則や制度の改革とむすびつけ、斗争・批判・改革とむすびつけてやらなければならない。大衆の十分なもりあがりと討論をとおし・試行をへて・健全で合理的な規則や制度をうちたてることは、節約を励行し浪費を防止するうえで不可欠の組織的な施策である。

プロレタリアートの政治を突出させ、革命の全局面を考慮しよう

増産節約運動をふかく持久的に展開するかぎは、指導にある。各段階の指導層は、プロレタリアートの政治を突出し、革命の全体の局面を考慮し、運動の全体的な計画と統一指導を強化しなければならない。

毛主席はわれわれに『政治工作はあらゆる経済工作の生命線である』と教えているが、プロレタリアートの政治突出のもっとも根本は、毛沢東思想で人を教育し、広範な大衆に毛主席の革命路線をやりぬく自覚をたかめさせることである。政治思想工作をうまくやりとげ、たえず広範な大衆と幹部の思想の革命化をつよめ、二つの路線の斗争を軸とし、増産節約をプロレタリアート独裁・社会主義の建設・世界革命の支援とむすびつけてゆかなければならない。実践が証明しているように、プロレタリアートの政治を突出し、人の思想を革命化して、はじめて増産節約運動に正確な政治方向をあたえ、顕著な効果をおさめることができるのである。南票鋌務局の節電工作において、はじめはただ電灯の頭をひね

るばかりで人の頭をひねらなかったので、電力消費量はずっと低下しなかった。のちに毛主席の『決定的な要素は人であって物ではない』という教えにてらして、人の思想の革命化に力をいれだしてから、電力消費量は持続的に大幅に低下しはじめた。1970年1～9月のあいだに1,400万キロワット時以上を節電し、それは、全局の4.5カ月分の使用電力量に相当していた。

革命的大批判の展開は、増産節約運動の巨大な推進力である。劉少奇の『業務優先』・『技術第一』・『物質的刺激』などの反革命修正主義路線を徹底的に批判し、その余毒を肅清しなければならない。なにに依拠して大衆の増産節約の積極性をひきだすかの問題について、ごく少数であれ、プロレタリアートの政治の巨大な作用を軽視する人がいる。無数の事実がしめしているように、労働者階級の社会主義的積極性は、毛沢東思想・プロレタリアートとしての自覚・自分の歴史的責任にたいするふかい認識・社会主義制度にたいする熱愛と帝国主義や修正主義や反動派にたいする怒りとうらみからでてくるのである。物質や奨励金にたよっては、けっして社会主義的積極性を刺激することはできず、それは資本主義思想をはんらんさせるだけである。過去の劉少奇一味のおしすすめた『物質的刺激』・『奨励金でひっぱる』やりくちは、増産節約運動を迷路にひきこみ、資本主義復活の条件をつくりだした。毛沢東思想・毛沢東革命路線に依拠してのみ、広範な大衆の増産節約の積極性と創意性をひきだすことができ、大衆がもっている無限の智慧と力量を発揮させることができるのである。

毛主席は、『二つの積極性があるのは、一つしか積極性がないのよりもずっとよく』、『中央の統一計画のもとに、地方でもっと多くのことをやらせる』べきである、と指摘している。社会主義工業生産を発展させるさいには、『全体の局面を考慮するよう提唱しなければならない』。われわれの社会主義経済は、党と国家の統一指導と全面的計画化のもとに、各単位の相互協力の条件のもとに発展する。したがって、増産節約運動の展開は、かならず全体の局面を考慮し、すべての計画・方案・施策は全体の局面の要求に適應させ、二つの積極性を発揮するよう留意しなければならない。いうまでもなく、原材料・設備・その他の物資は、いずれもまず国家計画を完成し、協同あるいは合同の任務を完成することを保障しなければならない。各企業・各業種・各地区のあいだでは、社会主義的協同と全一体観の精神をもって相互援助・相互支持をし、便宜は他人にゆずり困難は自分がひきうけるようにすべきである。こうしてはじめて全工業生産および建設が順当に進行し、多く・はやく・りっぱに・無駄なくということが実現できる。この点は、増産節約運

動のなかで、よく注意すべき問題である。

革命の全体の局面の観点にたつて、われわれは、やはり思想上の一面性を防止あるいは克服し、毛主席の革命路線とそれにつながる経済工作の系統的な方針・政策を全面的に実行してゆかなければならない。われわれは、『大いに意気ごみ、たかい目標をめざし、多く・はやく・りっぱに・無駄なく社会主義を建設しよう』という総路線にもとづき、『農業を基礎とし、工業を導き手とする』国民経済発展の一般方針にてらして、工業の農業にたいする支援を強化すること、工業は鉄鋼を軸とする方針をおしすすめ、冶金工業とその他の工業との関係・基礎工業と加工工業の関係を正確に処理すること、工業生産と工業基本建設の関係を正確にみきわめ、必要性と可能性・主観的能動性と客観的可能性を統一する原則にもとづき、生産と建設にたいする資金や物資の投入がすべて早急に生産能力に実現するよう力を集中し、力量の分散と戦線のいたずらな拡大を回避すること、さらに鉄鋼工業における製鉄部門と鉱山開発の関係を正確に処理し、鉱山建設を強化して、『米のない炊事』におちいらないようにすること、等々のことに十分注意しなければならない。党の経済建設の方針と政策を全面的に貫徹してこそ、国家全体が最大の節約を実現し、浪費を最大限にさけることができるのである。

革命の全局面をみる立場にたつて、われわれはまた、節約と増産を緊密にむすびつけ、増産のなかで節約・節約をとおして増産を実現しなければならない。合理的な技術操作規程をよく守り、品質の検査検収制度を健全なものとし、階級の敵の破壊と攪乱を警戒しつつ安全生産制度を樹立・強化し、事故の減少・防止につとめ、労働力・資金・物資のおもわぬ重大な損失を回避するようつとめなければならない。

増資節約は、社会主義建設の長期にわたる方針である。偉大なプロレタリア文化大革命をとおして、毛沢東思想は空前の普及をみせ、増産節約はすでに広範な大衆の自覚的な行動となった。われわれが毛主席の革命路線のさししめすとおり、自力更生・刻苦奮闘し、さらに大衆的な増産節約運動をふかく持続的にくりひろげてゆくならば、かならず工業戦線においてあらたなより大きな勝利をかちとることができるであろう。

(原載『紅旗』1971年第2期)

*

*

*

労働者階級の技術隊列を養成しよう

中共上海工作機械工場委員会副書記

張 梅 華

1968年7月21日、毛主席は、つぎのような指示をだしている。すなわち、『大学はやはりひらかなければならない。わたしがここで主としていっているのは理工系の大学をやっ
てゆくべきだということだが、学制を短縮し、教育を革命し、プロレタリアートの政治を
優先して、上海工作機械工場の労働者のなかから技術要員を養成するあのみちすじをあゆ
んでゆかなければならない。実践経験のある労働者・農民のなかから学生を選抜し、学校
でなん年か学んだのち、また生産実践のなかへ帰ってゆくべきである』。

毛主席のこの指示は、われわれの工場に明確な努力の方向をさししめし、われわれを大
いに力づけ、工場での斗争・批判・改革の運動をいっそうふかくおしひろめさせた。これ
まで2年あまりの斗争実践をとおして、われわれは、この毛主席のさししめしたみちこ
そ、マルクス・レーニン主義・毛沢東思想を会得し、同時に現代科学技術を掌握したプロ
レタリアートの知識分子の隊列をそだてあげるみちすじであり、またブルジョアジーの知
識分子の『天下支配』をうちやぶり、毛主席の『プロレタリアートは、上部構造・それに
包括されているそれぞれの文化領域においてブルジョアジーにたいする全面的な独裁をお
こなわなければならない』という指示を実現する百年の大計であることを、ふかく認識す
るようになった。

毛主席のこの指示を定着させてゆくために、われわれの工場の革命的労働者・職員は、
くりかえし学習と討議をかさねたうえ、1968年9月にころみに2年前後の学制の『7・
21』労働者大学をつくった。まず、その指導員計52名は、すべて各部門から選抜されてき
た同志であった。かれらは、比較的高度の階級斗争・二つの路線斗争についての自覚をも
ち、さらにゆたかな生産実践の経験をもっていた。1970年7月、『7.21』労働者大学は
一つの业余技術学校を附設し、政治的基礎が比較的しっかりした労働年数3年以上の青年
労働者を選抜して入学・学習させた。学制は2年制とし、毎週9時間の授業（3時間は政
治学習・6時間は技術学習）をおこなうこととし、第1期として137名の学習生を収容し
た。このほかに、三結合設計グループ・いろいろの専門問題ごとにおこなわれる短期技術
訓練班・科学研究工作への直接参加などのみちをとおして、実践のなかで労働者の技術的

中心人物を養成してきた。毛沢東思想を活学活用する大衆運動をおしすすめる過程で、1969年11月には、さらに一つの业余政治学校をひらき、毛主席の哲学著作およびプロレタリアート独裁下の連続革命にかんする学説・林副主席の九全大会政治報告を基本教材として、当面の情勢と結合させ、毛主席のプロレタリア革命路線の本質を真剣に学習理解し、『斗私・批修』をおこない、世界観を改造していった。労働者业余政治学校は、1カ月前後を一期とし、いままでにすでに9期をおえ、千人にちかい労働者・労働者の技術要員・新旧幹部・知識分子・および管理事務要員が学習に参加した。これは、全工場人員の6分の1にあたる。さらによりよく学習をすすめるために、1970年6月、われわれは二つの业余文化学習班をひらいた。学習参加者の大部分は、古参の労働者であり、その70%が党員ないし幹部であった。わたし自身も、文化学習班に参加した。2年来、毛主席の指示のみちびによって、われわれの工場では业余教育網が初歩的に形成され、常時400名前後の労働者が在籍し、政治・文化・技術を学んでいる。

ただし、毛主席の指示したこのみちをあゆむことは、けっして順風満帆というわけにはゆかず、二つの路線・二つの世界観の激烈な斗争の継続であった。

なんんかの幹部は、労働者技術要員を養成することのふかい政治的意義を十分認識しえないまま、労働者から大学や三結合設計グループに参加するものをえらびだすとき、自分の『小天地』の必要からだけ考え、プロレタリアート独裁を強化するという根本的利益から出発することができず、したがってなるべく優秀な労働者をおくりださないようにし、あるいはたとえおくりだしても、いろいろ口実をもうけてよびもどそうとした。このため、工場党委員会および工場革命委員会は、たえず大衆を組織して毛主席の指示をくりかえし学習し・劉少奇の反革命修正主義路線を批判し・労働者階級が政治上の指導権を掌握するだけでなく、科学技術の指導権を掌握してはじめてブルジョアジーの知識分子のごまかしや威圧をしりぞけ・ブルジョアジーにたいする全面的な独裁を可能にし・中国革命と世界革命に貢献しようということを認識させていった。実際、われわれの工場の現在の技術隊列では、政治上からみても技術上からみても、まだまだ社会主義革命と社会主義建設のあたらしい高潮の必要に完全に適応しえないでいる。

広範な革命的労働者・職員は、熱心に业余の政治・文化・技術教育の発展をもとめていた。しかし、われわれのある幹部は、劉少奇の『大衆たちおくれ論』のえいきょうをうけ、逆に主観主義的に労働者は业余时间に関心をもって学習するなどできないときめこんでいた。このような思想傾向にたいし、工場党委員会と工場革命委員会は、大衆的な大

討論を組織した。その結果、大多数の労働者のこたえは、学習しよう／＼ということであった。名のりだけで入学する労働者がひきもきらず、われわれの工作がそれに乗ずることができないまま、いままでまだ入学の機会がまわってこない労働者が多数いる。事実が証明しているように、広範な革命的労働者・職員のこのような政治的情熱の高まりは、劉少奇の『大衆たちおくれ論』にたいするもっとも有力な批判である。

どのような労働者技術員を養成するか・またどのように養成するかという問題についても、激烈な斗争が存在していた。幹部のなかには、プロレタリア文化大革命をとおして政治指導権の問題はすでに解決したが、どのように技術水準をたかめるか・一定の製品をどのようにつくりだすかが主要な問題としてこのさされている、と考えるものがあった。若干の労働者の同志たちは、このような思想のえいきょうをうけ、かれらを大学におくり三結合の設計グループに参加させても、盲目的に自分は労働者階級の出身であるから思想改造は大した問題ではなく、主要な任務は技術を学ぶことだと考えていた。このようなプロレタリアートの政治をはなれ単純に『技術第一』を追求する思想は、実際には劉少奇の『階級斗争消滅論』の一つの余毒であり、きわめて危険の大きいものであり、毛主席の教えに完全に違背している。毛主席は、『プロレタリアートの政治を優先させなければならず』、『労働者のなかから技術要員を養成するみち』をあゆめ、といている。このはじめの一条がなければ・終始この一条を堅持するのでなければ、毛主席指示の根本方向をあやまることになる。『優先する』とは、つまり統率的作用・指導的作用をもたせることであり、毛主席のプロレタリアート独裁のもとの連続革命の理論・路線・政策でもって自己の思想と行動を指導することではなければならない。プロレタリアートの政治が優先しなければ、必然的に技術が優先し、事実上ブルジョアジーの単純な技術的観念および個人主義が優先し・発展してゆき、しだいにブルジョアジーの思想にそまってゆくのである。かくては、『労働者のなかから技術要員を養成するみち』をすすむどころか、修正主義のみちをあゆむことになってしまう。そのように養成された人間は、いくらかの技術は学びとってくるだろうが、プロレタリアートに奉仕することは不可能であり、修正主義路線のためにのみよくつくす。プロレタリアートの隊列のなかからでた人間がブルジョアジーに奉仕する知識分子に変質してしまうという教訓は、これまでもなかったわけではない。したがって労働者技術員の養成は、かならず政治と業務の関係を正確にとらえ、まずなによりも労働者技術員により多くマルクス・レーニン主義・毛沢東思想を把握させ、三大革命運動の実践のなかで真に自分の世界観を改造するということから目をはなさず、あらゆる工作をお

こなわなければならない。

毛主席のさしめしたみちを堅持しておしすすめる具体的実践のなかで、工場党委員会および工場革命委員会は、階級斗争を主要な課題とし、毛沢東思想の活学活用を第一とするということに留意した。『7.21』労働者大学では、日常的にさまざまな形式の毛沢東思想学習班をひらき、また日常的に労働者の学生が工場の斗争・批判・改革運動に参加するよう組織し、さらに部隊へいって解放軍に学び・人民公社へいって農民に学ぶよう組織し、かれらがプロレタリアートの政治からはなれないよう、党・農・兵の基本的大衆からはなれないよう、さらに社会主義生産労働からはなれないようにした。この2年来、労働者の学生の階級斗争と二つの路線斗争の意識はひろくいっそうのたかまりをみせ、若干の同志は共産党に入党した。

われわれは、毛主席の指示したみちを前進するなかで、もう一つ別の誤った傾向『技術無用』論とぶつかった。少数の人たちだが、かって『学習して理論化するまで会得すれば、天下にこわいものなし』ふきまくった人たちは、いまでは別の極端にはしって、理論化の要はないといっている。かれらは、技術を学習している人をみれば、『技術優先』とか『政治を突出させていない』と批判する。われわれの若干の同志たちは、このような謬論のえいきょうをうけて、技術書などにふりむこうとしなかった。このため、われわれは、『技術第一』論を批判すると同時に、またその変種である『技術無用』論も批判したのである。まさに『読書無用』論は、『書物を読んで官吏となる』やりかたのうらがえしであり、『技術第一』のやきなおしにすぎない。毛主席は、われわれに『わが国の人民は、一つの遠大な計画をもつべきである。数十年のうちに、わが国の経済上ならびに科学文化上のたちおくれた状況を改善し、早急に世界の先進的水準にたつするよう努力しなければならない』と教えている。この目標を実現するためにも、労働者階級は、技術を掌握するだけでなく、技術の不断の向上をはからなければならない。われわれは、毛主席の『実践・認識・再実践・再認識』についての教えとこの工場の生産の実際および技術的な特長とをむすびつけ、多く・はやく・りっぱに・むだなく労働者技術員を養成するみちをみつけたそうと努力した。労働者大学は、教育の全課程を短期基礎知識の学習・実践しつつの学習・理論向上・および再実践の4学習段階にわけ、比較的よい効果をおさめた。最初の3段階までをとおして、52名の学習生のうち、14人は普通外円研磨盤の全体設計の仕事を独立してやりおおせるようになり、27人はその部品を独立して設計し、11人は教員の指導のもとにおなじ部品の設計ができるようになった。現在は、すでに『再実践』の段階にはい

り、実習生を工場の科学研究・設計・土法設備製造等の各職域に分配し、実践のなかで自分の政治思想水準をたかめつつある。

二つの路線・二つの世界観の斗争は、われわれの工場にもとからいた250名の労働者出身の技術要員のなかにも存在していた。これらの同志がひきつづき毛主席のさしめしたみちをあゆみつづけるかどうかの問題でもっとも重要なことは、プロレタリアートの政治・労働者大衆・生産実践、この三つからはなれないことの堅持である。もしそれらからはなれてしまえば、労働者技術員は、労働者と共通のことばがなくなり、しだいに変質するであろう。特に指導的地位に選抜されている労働者技術員は、警戒心がなければ、しだいにブルジョア的なものになれそめ、ブルジョア知識分子の手だすけをして労働者大衆をしかりとばすまでになってしまう。労働者でも労働者技術員でも、技術をまなびあるいはそれをさらに向上させようとするとき、かぎは正しく毛沢東思想を把握しているかどうかにある。このことが、労働者の技術隊列前進の根本問題である。毛主席にたいし素朴なプロレタリアートの階級的感情をいだいていたひとりの労働者技術員は文化大革命以前、ブルジョア知識分子からからかわれ・いじめられ・排斥され、ABCもわからないでどうして設計ができるものかなどいわれていたが、かれは、ブルジョアジーの技術『権威』との斗争を堅持して、奮闘して困難を克服し、一定の技術を掌握して国家のために貢献した。この時期には、かれは『われわれ労働者が権力をにぎったのだから、あとは工作機械を設計しておればよい』というあやまった思想に支配されて、技術を突出し・設計に没頭し・政治学習をおろそかにした結果、階級斗争の観点がしっかりせず、政治優先があいまいであった。学習をとおしてのち、かれは自分の経験をかえりみて、つぎのように問題を提起している。すなわち、自分は、党に養成され努力もかさねて、現在技術の面ではブルジョアジーとたちうちすることができるが、うらぎり者揚献珍のような哲学騙りと闘うにはどうすればよいのかとまどいを感じる。この問題は、われわれすべてにたいして大きな教育的意味をもっていると。かれは、労働者階級が毛沢東思想を掌握することの大きな重要性をあきらかにしているのである。

事実がしめしているように、毛主席の指示を定着させてゆくみちは、一步前進するたびに多くの障害を克服し、激烈な斗争をへなければならぬ。この斗争は、本質的には、プロレタリアートとブルジョアジーの改造と反改造の斗争であり、プロレタリアート独裁を強化するかブルジョアジー独裁を復活させるかの斗争である。この斗争は長期にわたって継続する。われわれは、毛主席の路線問題は『毎年論議し・毎月論議し・毎日論議し』な

ければならないという教えにしたがい、この斗争を徹底的におしすすめ、マルクス・レーニン主義・毛沢東思想で武装した労働者の技術隊列を不断に強化発展させてゆこうと決意をかためている。

(原載『紅旗』1971年第2期)

* * *

労働者階級に依拠して企業管理の合理的な 規則と制度をうちたてよう

——沈陽機関車車輛工場起重機部門における不合理な
規則と制度の改革についての調査報告——

遼寧省革命委員会

沈陽市革命委員会

連合調査

人民解放軍沈陽駐在某部隊

沈陽機関車車輛工場起重機部門は、工場革命委員会と解放軍の左派支援要員の援助のもとに、毛主席の『三結合の革命委員会の樹立・大批判・階級隊列の純潔化・党の整頓・機構の簡素化・不合理な規則と制度の改革・課室要員の生産現場へ下放——工場の斗争・批判・改革は、大体このようないくつかの段階をへる』という教えにしたがい、党の整頓と再建の基礎のうえに、『鞍鋼憲法』の旗をたかくかかげて、昨年(1969年)5月から不合理な規則・制度の改革をはじめ、今日(1970年末)すでに合理的な社会主義的規則・制度を初歩的にうちたてた。

この部門は、主として軌道車輛の修理任務を担当している。全部門の合計人員は270人。1年以上以前から、部門の党支部の指導のもとに、労働者大衆が思想を管理し・生産を管理し・計算を管理し・生活を管理し、政治・思想・経済の各面から企業にたいする管理をつよめ、ブルジョア階級にたいする全面的独裁をつよめてきた。昨年、この部門は、『四好単位』と評定され、省・市の毛沢東思想活学活用の積極分子代表会議に出席し、54名の『五好工人』を輩出させた。達成量はいちじるしく増大し、コストは半減し、車輛修理の

質の面でも、従来3・4回ときには7・8回も試運転をしてのち合格していたものが、ほとんど1回の検査でパスするようになった。労働者大衆のいきごみは、大いに高揚している。

社会主義的規則・制度は、プロレタリアート独裁の強化のために奉仕するものでなければならない

起重機部門における不合理な規則・制度の改革は、二つの階級・二つの路線・二つの思想の尖鋭な斗争の場をくぐってきた。この部門の多数の幹部と大衆は、斗争・批判・改革というあたらしい問題にたいし積極的・情熱的であり・大胆でもあったが、一部の人たちのあいだには、なおあやまった認識があった。ある幹部は、規則や制度がなければ、話をしても人がきかず・生産を管理するにも方法がなく・指導するにも権限がないということになり、規則や制度があればあったで、『利潤優先』・『生産第一』・さらには『管理→監視→圧迫』といったあやまりをおかすことをおそれてしゅんじゅんしていたし、またある青年労働者は、規則や制度がないほうがてっとりばやく、おもちゃいじりをしてなんになるといつていた。ひとにぎりの階級の敵は、これに乗じて扇動し、『斗争・批判・改革は絶好の機会だ、賃金・福利に問題が多い』といて、意図的に斗争をよこしまな方向にひきこもうとした。

部門の党支部および革命指導小組は、このような状況に対処して、くりかえし『鞍鋼憲法』を定着させる学習会をひらき、階級教育と路線教育をとおして、自由主義・無政府主義・経済主義等のブルジョアジーの思想傾向を克服し、全員の認識を統一していった。

学習会では、主としてつぎのいくつかの工作に重点がおかれた。

(1) 解放前の苦痛をおもいだす教育をすすめて、労働者大衆のプロレタリア的感情をたかめ、資本主義的規則・制度がブルジョア独裁を擁護する道具であることをはっきりと認識させる。そこでは、ふるい労働者による旧社会の告発が組織された。

(2) 革命的大批判をくりひろげ、路線斗争の決意をかため、修正主義的規則・制度が資本主義の復活に奉仕するものであることをはっきりと認識させる。プロ文革以前、この工場の走資派は、70万字におよぶ規則・制度をもうけて数しれぬ関所をつくり、また大いに物質的刺激をもちあげて100種以上の奨励規程をつくり、ねじくぎ一本の節約にもかねをはらわなければならなかった。これらは、ひどく労働者の魂をくさらせ、その団結にひ

びをいれた。

(3) 不健全な規則・制度の危害をあばき、社会主義的規則・制度がプロレタリアート独裁の強化に奉仕するものであることをはっきりと認識させる。改革前においては、もともこの部門にあった規則・制度のうち、合理的なもの・あるいは必要なものまでが廃止されたり、また不合理なものが表面では廃止されながら実際には生きていたり、しかもまだあたらしい規則・制度が健全にうちたてられていないため、企業管理が混乱し、浪費や欠損をまねいていた。ひとにぎりの階級の敵は、またこの機に乗じて汚職や窃盗をやり事故をつくりだした。このように、健全な社会主義的規則・制度がうちたてられなければ、労働者大衆の積極性と創造性を十分に発揮させることができず、革命と生産の飛躍的發展の新情勢に適応することができず、社会主義経済の基礎をかためプロレタリアート独裁を強化することができないことを、事実をもって説明する。

この回想・批判・暴露をとおして、社会主義経済計算と資本主義の利潤優先との区別を明確にし、社会主義の生産を發展させることと政治をはなれた『生産第一』との区別を明確にし、さらにプロレタリアートの革命的規律とブルジョアジーの管理・監視・圧迫との区別をはっきりとさせて、幹部と大衆が規則や制度はゆらいすべて一つの階級の他の階級にたいする独裁の道具であることを認識するまでにいたらせる。われわれプロレタリアートは、かならずこの道具を掌握し、自分で自分を管理し、社会主義企業をりっぱに管理し、ブルジョアジーにたいし全面的な独裁を実行しなければならない。

労働者階級は社会主義企業を管理する主人公である

社会主義企業は、どのような規則・制度を必要としているのか。はじめ、ある指導幹部は、『指導に権限あり、大衆はこれにしたがう』制度が当然必要と考え、またあるものは、『制度は労働者に「うまみ」がなければならない』と考えていた。革命的大批判をとおして、かれらは、『労働者を管理する』制度をたてようとするれば『専門家による工場支配』の翻案となり、『うまみのある』制度をたてようとするれば『物質的刺激』の余毒をもつとさとりていた。かれらは、幹部の権力は労働者階級から付与されたものであり、したがってプロレタリアートの政治を突出させ、『鞍鋼憲法』の規則・制度を全面的に定着させてゆかなければならないと考えるようになった。

このような指導思想にもとづいて、かれらは、一が分れて二になる観点から、もとから

ある規則・制度について階級的・科学的分析をすすめた。もともとある規則・制度のうち合理的な部分もあるが、それは主として生産の法則的な要求なり規定なりに合致しているからであり、また不合理とされたものは、主としてプロレタリアートの政治を突出させず・労働者階級に依拠せず・労働者を被管理の立場においていることに原因があると考えられた。したがって、不合理な規則・制度を改革するさいもっとも重要なことは、つまりこの路線問題を解決することである。その合理的な規定なり要求は、これを確保して科学的に生産を組織しなければならない。と同時に、反革命修正主義路線のえいきょうを肅清して、労働者階級を真に社会主義企業を管理する主人公としなければならない。

社会主義的規則・制度は、かならず労働者大衆に依拠して制定されるのでなければならない。労働者大衆は、豊富な階級斗争と生産斗争の経験をもっており、なにをうちやぶり・なにをとどめおき・なにをうちたてるべきかは、かれらがもっともよく知っている。部門の指導部は、大衆を発動して大いに意見をのべさせ、広範な労働者大衆はまた、規則・制度について636条の改革案を提出した。かれらは、大衆の意見を問題ごとに区分し、逐次大衆にわたして討論させ、批判をくわえてはただちに改訂し、反復実践し、反復改訂し、広範な大衆の智慧をあつめ、党の一元的指導のもとに指導班員の思想の革命化をうまくやりとげ・解放軍に学んで四好運動を展開し、恒常的な思想工作などの政治工作制度をうちたてた。『起重機部門管理要綱』・『起重機工場修理規程』も改訂された。生産計画・技術技能・品質検査・安全設備・経済計算・生活サービスの6項目の制度もうちたてられた。生産計画の面では、指導部が現場までおりてゆき、大衆が討論し、指揮系統を一本化し、班組が協同するという大衆が制定した大衆管理制度をうちたてた。品質検査の面では、自己検査・相互検査と専門職による検査をあい結合した品質検査制度をうちたてた。技術技能の面では、指導幹部・労働者大衆・技術要員が一体になって一つの問題にとりくみ・設計し・試験し、実際に運用するという技術革新制度をうちたてた。経済計算の面では、班組計算を基礎として、部門・班組の二級計算制をうちたてた。

これまでは、計算業務は部門の段階に集中しておこなわれ、6人の専門要員が事務室にすわったまま報告をつくり・計算をし・血のかよっていない帳簿をつけるにまかせていた。計算しているのは、単純な経済的側面であって、人間の政治的要因をみることなく、生産の実際の状況および潜在的生産力を反映することは不可能であったし、さらに費用が上昇してゆく原因をみいだすことができず、長期にわたる欠損の局面をずっと転換しえないうでいた。現在では、この部門には1名の専門職の計算係がいるだけで、それぞれの班ご

とに1名の生産から離脱していない経済計算管理員がおかれている。労働者大衆は、一人ひとりが計算に参加し、計算してからことをおこない、なにごとでもやればかならず計算してみる。部門では、毎月各種の計算の記録と結果を公表し、あわせて経常的に労働者が参加する経済計算分析会をひらき、経済問題をとおして政治をみ、生産情況をとおして路線をみ、数字でうめた表から思想をみ、情勢の討議・思想の点検・手ぬかりの調査・その処置を講ずること、これらをあい結合している。このようなあたらしい計算制度は、これまでの死んだ計算・単純な経済計算を活きた計算・革命のために多大の貢献をする政治計算に変貌させた。このことが大いに大衆の積極性を発揮させ、改革前にくらべて、現在は1台あたりの実際労働時間は42%、材料費は34%、管理者は64%まで低下し、修理費用は不断にひくめられるようになった。

この部門では、また党支部の指導のもとに、二級（部門革命指導小組——班委員会）三結合（指導幹部・労働者・技術要員）の管理体制をうちたてた。従前は、走資派が『単独責任制』・『専門家による工場支配』をおしすすめ、部門党支部はただその保障任務をおうだけで、部門の管理は『単独責任者』（部門主任）および『四室』（検査室・技術室・生産室・管理室）にゆだねられていた。現在では、それぞれの班ごとに班長（党小組長兼任）・副班長・労働者代表を中心として、それぞれの業務工作に責任をもつ6名の『大衆管理員』がくわわって班委員会をつくり、班全体の革命と生産の実行にたいする全面的な指導をおこなうようになった。大衆管理員は、各班の民主的選挙でえられ、党支部が批准し、『四好』の総合的評価と結合して定期的に改選する。各班の6名の大衆管理員（全部門10班・計60名）は、それぞれ労働者を主体とし技術要員をくわえた6個の『大衆管理網』を形成し、党支部の指導のもとに、班組からはなれず・大衆からはなれず・労働からはなれずに、部門の生産と生活の管理工作に責任をおう。『大衆管理網』は、すでに監督作用を発揮し、十分にその職権を行使している。

あたらしい管理制度と管理体制は、『両参・一改・三結合』の原則を體現し、『心から労働者階級に依拠する』という革命路線を體現しており、また社会主義企業における人と人とのあたらしい型の関係を反映している。労働者は、生産者であると同時に管理者であり、幹部は、指導者であると同時に普通の労働者でもある。技術要員は、業務管理の『参謀』であると同時に労働者から再教育をうける小学生でもある。

あたらしい規則・制度は、つぎのような特長をそなえている。

(1) 党支部の指導のもとに、労働者階級が規則・制度の制定に参加し、監督指導の権

限をもつのみならず、直接に企業管理に参加するということは、プロレタリア文化大革命以前の労働者階級に依拠しないで企業を管理していた状況を改変したものである。

(2) 二つの路線の斗争についての教育を突出させたこと。『大衆管理網』は、生産のために生産を管理するのではなく、路線をつかみ方向をみいだすのである。つねに生産中にあらわれた問題と結合して路線が正確かどうかを分析する会議をひらき、革命的大批判を展開し、たえず毛主席の革命路線の自覚性をたかめつつことをおこなうのである。

(3) 幹部が労働に参加すること。従前は、この部門で生産を離脱していた幹部は35名にたっていた。現在では、その大部分が班組において労働し、再教育をうけ、労働しているその持場で中心的な作用を発揮している。班組にくみいれられていない7名の幹部のうち、党支部の正副書記は、月ごとに交替して労働に参加し、5名の専門管理要員は、いずれも一定の『定着』する班組をもって、第一線で指導をおこない・生産を指揮し・班組の建設に力をいれている。

(4) 『現場指導』を主とすること。『規則万能』の旧体制をうちやぶって、党支部は根本的な権限を総攬し、具体的な権限は分散し、支部での決定は班組の現場でこれを実行し、共同作戦をするというやりかたを実行した。

革命的規則・制度は革命的な人間に依拠して実行すべきである

あたらしい規則・制度は、プロレタリアートの政治を突出させたものである。しかし、それを定着させてゆくなかでは、またつねに政治を突出させるか業務を突出させるかの斗争がある。この部門のある幹部はかつて朝から晩まで『大衆管理網』の活動展開を督促するのにかけずりまわり、報告書づくりに熱心なばかりで、あたらしい規則・制度を定着させることができなかつた。労働者たちは、『規則をどのように改めてみても、人の思想を改めなければなんにもならない。なにを一生けんめいにやったところで、革命化を一生けんめいやらなければむやみやたらというものだ』と批判した。そこで党支部は、支部委員会および班組の中心人物で学習班を組織し、毛主席の政治がすべてを統率し『政治工作はあらゆる経済工作の生命線である』という教えを反復学習し、人びとに革命的規則・制度は革命的な人の自覚的な実行にのみ依拠していること、人の思想の革命化なくしてどのようなりっぱな規則・制度も効力がないことを認識させた。千条万条の規則も、毛沢東思想によって人を教育することがその第1条である。そこで、このあたらしい規則・制度を定

着させてゆくなかでは、思想の革命化を高揚させることをまず第一におき、つぎの三つの環節に力点をおくことにした。すなわち、(1) 一連の日常性をもった思想政治工作制度を定着させること。(2) なんんかの大衆性をもった政治思想工作の活動家の隊伍を養成すること。(3) 革命的な大衆を連帯させてゆく一つの指導部をもうけること。この三つの環節をしっかりとつかまえ、思想政治工作を大衆化し・日常化し・制度化することによって、どのような状況のもとでも思想政治工作の規則・制度にたいする統率作用を十分に発揮させうるようになるのである。

あたらしい規則・制度の定着は、またかえって人の思想の革命化を促進させる。労働者は、あたらしい労働時間ノルマを実施する過程で、実際労働時間の記録を革命への貢献と対比し、思想の革命化のたかまりと対比して記入するということをとおして、ノルマを積極的に完成し突破し、さらに自主的にノルマの改訂を要求するにいたっている。組立班のあたらしいノルマは1台あたり517労働時間であり、旧ノルマにくらべて56%減となっていたが、最近では、さらに自主的にこれを425労働時間までおしきげている。

この部門でうちたてられたあたらしい規則・制度は、実践のなかで一步づつたしかめられ・改革されてきたものである。部門の行政指導機構は、革命指導小組をのぞいて、そのまま継続させるか別の機構をたてるかをなお検討中である。さらに、その他のいくつかの全工場にわたる問題については、解決に手をつけはじめたばかりである。当面のところ、北京の模範工場にまなんで、それにおいつこうと前進をつづけている。

(原載『紅旗』1970年第12期)

〔付記〕

本稿が印刷所へまわされたのち、この資料の第一論文(国家計委写作小組『深入開展工業戦綫的増産節約運動』・『紅旗』1971年第2期所収)が、本稿よりずっと簡単に要約されて『北京周報』1971年第15号に掲載された(紀偉『工業戦綫における増産節約運動』)。
『紅旗』論文中重要なものは、通常おそくとも3~4週のうち『北京周報』に訳載されるのが例なので、この論文はもはや訳載されないものと判断してここにとりあげたのであるが、一つにはすでに組版をおえており、もう一つには本稿のほうが詳しく紹介しているので、いくらかの意味はあるとおもい、このまま印刷することとする。付記して了解をえたい。